

(別紙2)

## 審査の結果の要旨

氏名 志田雅宏

本論文は、13世紀、スペインのカタルーニャ地方の小都市ジローナを拠点に活動したユダヤ教のラビ、モシェ・ベン・ナフマン（1193－1270）、ラテン語名、モーゼス・ナフマニデスの聖書解釈の研究によって、この人物の思想の多面性を総合的に抽出した宗教史的、宗教思想的研究である。この人物は、ユダヤ教史上、中世の聖書註解の分野で画期的業績を挙げたことでつとに知られたラビだが、日本においてはほとんど先行研究がなく、その意味で本論文は先駆的な研究であることは言うまでもない。しかし、そればかりでなく、本論文はユダヤ人研究者の先行研究を網羅し、自身の明解な主張も展開して、中世ユダヤ教思想の全貌を描き出すという取り組みとしても、高い水準に達する貢献をなした点で大変優れており、全員一致してその成果を高く評価しえたものである。

ナフマニデスが生きた13世紀のカタルーニャは、王権がユダヤ社会を優遇したことにより、周囲のユダヤ社会との交流が活発で、ナフマニデスは、先行する各地のユダヤ文化の粋を集める学問的環境に生きたことが紹介され、ラシやイブン・エズラの聖書註解、モーゼス・マイモニデスのハラハー学と哲学、プロヴァンスやレオンで活発化したカバラ思想などが流入し、ナフマニデスが、これらの多様な立場のユダヤ賢者のそれぞれの学問的方法・知的伝統を吸収しつつ、学問的に総合するという独自の地位を構築したことが、本論文によって説得的に語られている。

ナフマニデスは、ユダヤ宗教思想に関して自ら体系的な著作を行っていないため、志田氏はナフマニデスの代表作『トーラー註解』を中心に、その他の説教や『ヨブ記註解』なども利用しながら、ナフマニデスが直面した様々な思想上の問題をえぐり出そうとした。序論で、教典論の視点を応用して、聖典註解のテキストが抱える諸論点——註解の権威、解釈の多層性、字義と秘義、哲学的営為、神秘主義的理解などの論点を抽出し、第2章から第14章まで、ナフマニデスの註解テキストから思想と世界観の格闘の痕を丹念にたどって、ナフマニデスが直面した問い、そしてそこから導かれた彼の思想的到達点を説得的に導いている。

人間はいかにして無限なる神の意志に接近しうるのか、神の啓示の書とはいったい何であるのか、なぜ解釈が秘匿されねばならないのか、哲学はユダヤ教文化にとってどうあるべきか、占星術の学問はどこに真理を認めうるか、聖地とはどうあるべきなのか——これらは、どれひとつをとっても、丹念な掘り下げが必要であり、それを十分果たしたことが確認される。確かに志田氏の分析には、部分的に、例えば、キリスト教徒との論争における概念の掘り下げの甘さや聖書註解の歴史におけるナフマニデスの位置づけの説明が不十分であることなどが見られるのも確かである。しかし、志田氏は、中世のユダヤ文化最盛期の問題群を包括的に提示するという課題を自らに課して果敢に挑戦し、それを、学的水準を維持しつつ成就した意義は極めて大きい。

以上により、本審査委員会は、全会一致で、本論文を博士（文学）の資格に値する論文であると判断する。